414
A 1947

大正十一年四月
大隈侯爵邸寄贈

酒税法改正ニ付意見

近日政府ハ酒税ニ付閣議ヲ決定ノ場合ニ付テハ
改正ニ付過日衆議院政論入御参考ニ供セラレ
候ヘトモ尚左重複意見左ノ如ク陳述仕候

酒税法ノ事

国家ノ歳入ニ従量税及ビ一定不動ノ税額ヲ用ヒ
ラルル事ハ之ヲ認ムルモ酒税中酒税ノ従価税ヲ
ヘキ理由ナキノメシ

一自家用酒ヲ廃ス

スヘキ廃酒ト都人士ノ口ニスル醸酒ト同税ヲ
課スヘカラス

一酒税ヲ従量トスル場合ニ造石高ヲ減シ

2751

テ壹俵ヲ壹ウシ租金ヲ減ズノ筆ニ出ツベシ而シテ
酒俵ニシテ為メニ貴キヲ以テ酒ヲ造ル者困難シ
酒造家利益多クシテ政府ノ歳入減ガスベシ
一従来ノ租ノ使意ハ味淋生醪混成酒濁酒等ヲ
同一課租トスルノ公平ヲ得ベシ而シテ課租酒俵ハ
其年ノ壹俵ニ為サンヘカラズ若シ然ラザレバ歳入減ズ
ニ確實ヲ欠ク久シ何トナレバ酒造家造石ヲ減ズレバ
酒俵賠償スベキヲ以テ政府ノ歳入ニ異動ナキ
ヲ得ベシ
凡其年ノ酒俵ヲ定ムルニ酒租ヲ納期ニ於テ確定
スベシ去納期ニ為ス年ノ酒俵ニ準シテ後納
セシムベシ

拾二行 著屋製

一納租酒俵ノ標準ニ一郡若シクハ一部落ノ酒俵同
一ノ區域ニテ標定シ為ス年七月ヨリ当年盲迄
十二ヶ月間壹俵平均ニ標テ定ムベシ
一従来一斗七錢ノ酒租ヲ十五錢トカスリ一信以上
ノ增加ヲトテ世間器ニ多クベシ而シテ酒租ノ酒
俵ハ割メルベシトカ又酒俵一信ニ対スルノ
法律ヲ変ズ一定ノ税率ハ稽当ナニ似テ人之シテ
怪シマサンベシ而シテ其結果ハ八割ノ酒租ハ凡
三千萬円内外ノ增ヲ得ベシ又一信ノ酒租ハ
似金造石ノ減却ヲ見ル俵ニ四千萬円以上
ノ增ヲ得ベシ酒租一信決シテ重税ト称スル
ヘカラザル是畢竟朝四暮三ノ手段ニ似タリト

為ニ無之ニテ好市便ト存ズル足ルベシ

地租ヲ得税豁業務概事

市街定地租ヲ得カンセントスルノ議ハ超越シタル可成
宅地ト畑ニ地租ノ如キハ苟クモ時ヲ待タスシテ
ヲ望ム何トナレハ市街定地ノ如キハ之レヲ田畑ニ比シテ低
税ナルヲ論ナシト雖モ既ニ述ヘタル市街定地中旧慣信
地料ノ節カヲヘカラサルモノアリテ地主ノ所得ハ地價ノ
時世ニ移ルヲサマデ増加セサル向キアリ其公平ヲ
得ンヿ殆ト難カラシ仮令何程不公平アリトモ旧ノ
儘据置ク歟若シ改正セントスレハ今日ト長ク地租増加
ヲ設ケサレハ地價低下ノ議起ルヘカラス今期議会

拾二行墨屋製

ノ如キ多事ノ際ニ臨ミテ地租而得税ノ如キモノニ手
ヲ着クルハ甚タ得策ナラス出ヲ得ハ一刀両断
地租業務税ヲ全廃シテ而得税ノ一途トカスヘシ
地租業務税ヲ廃シテ而得税ノ一途トカストキハ
而得税調査ヲ徹底ノ如キ為サンヘカラス
但借地ヲ制定シテ借地人(小作人)ノ権利義務ヲ
明カニシ田畑定地法ヲ一業ニ借地法ヲ以テ定
テ来金表ヲ以テ物品等旧慣ニ依テ之レヲ定メ登記
而乃所有ノ土地業務ニ登記セシメ自住ノ宅地
自作ノ田畑等法ヲ以テ陸地ニ比シテ借地料ヲ公定セシム
而シテ地主借地人ノ合意ヲ以テ之レヲ偽ル者ニ四討
則ヲ設クルノ必要アラン

地租改正ノ結果ニシテ所得税ハ
為メニ減ル出来ナル者多ク所得税調査
場合ハ所得税調査委員ニ於テ毎年調査
シタルモノ定ムベキモノ
所得税ハ累進ニシテ廃セラレ地租
所得税ハ累進ニシテ郵便電信等ノ
所得ノ一部トシ農商工ノ営業
テ労働ヲ生ズル所得ハ国民ハ国家
ノ為メ今後十年間関税権ノ為事ヲ服スル
迄忍ビテ第一部ノ所得税ハ百分ノ十トシ
第二部ノ所得税ハ百分ノ五トシ為メニ第
二部ノ所得税ハ最下級百五十円以下ニ免除

例ヲ要ズルトスレハ現法地租営業税所得税ニ
比シテ無慮五百萬円ノ増加ヲ見ルベシ
所得税ニ用ル米麦豆其他ノ物価ハ前年七月
一日ヨリ当年六月三十日迄ノ平均相場ヲ以ベシ
此ニ移シ所得税ノ増減ハ物価ノ高低ニ應ジテ
昇降スベキカ故ニ政府ノ歳出ト随伴スルモノトシテ
地租ハ二体ノ税ニシテ地価ノ事業税ニシテ事業
以テ国民真成ニ均一平等ノ課税ヲ為ス
ベシ地租ノ如キ封建時代ノ遺ヲ墨守シ
国民ノ必要品ハ未タ撤廃ヲ抑制スルカ如キ
経綸ハ改革家ノ為テセザル所ナリ之法ニ

樺太・沖縄地海道基隆ヲ同一税法ノ下ニ
支配セラルベシ

関税保護主義ノ害

我国開港以来関税保護主義ヲ採ラサリシハ
實ニ千歳ノ遺憾ニシテ今日国勢ノ艱難ニ寡ニ此一
事ニ基因スト明治三十年間僅カニ民業奨産ノ端緒
ヲ開キタルハ銀価下落ト云フ一種天然ノ海関保護
法ノ使使アリタルニシテ而シテ今日ノ経済界ノ
困難ハ此ノ天然保護法ノ反郷ニ出テタルト思ハレカラス
果シテ然ラハ金貨本位制定ノ今日ニ於テハ宜早復セ
天然海関保護法ヲ無ラシメンカ能ハサルモ
銀価下落ノ如キ得ヘカラサル所ノ使使ヲ

保持セント欲セハ今後ニ於テハ人為的海関保護法ヲ
採ラサルヘカラス

條約改正談判ノ陸我国ハ保護主義ヲ採ラサル旨ヲ
明言シタルヤ彼ハ何ト云ヘ何ト云ヘ我国定税率ノ改正ヲ不可ナリトスル者
アリ是論ハ其ノ甚シキモノナリ何トナレハ保護自由両政
策ハ政事上ノ主義ニシテ我ト主義ヲ異ニスル政府ト共ニ雖
相容レサル国モ尚然ノ如キ実例ハ里ニ多シ今ヤ憲政党内閣
新タニ成立シタルノ日ニ於テ措テ保護税主義ニ依ラサルヘカラス
何レノ日カ国家ノ為ニ之ヲ見ン但條約改正ノ相談英国
ニ於テ成立シタルノ日ハ我国征清後ニ於テ均霑ノ約
之ヲ以テ進ンテ能ハサルモノトセハ我国ノ今日ハ戦後国費
ノ加倍シタル租税ノ負担ヤ堪ヘカラサル何レノ国ヲ

之レヲ認メサルニ代ル旨者ハ断然タル但事ヲ能ク
スルニ及ハス所ロ之ヲ保護改革ヲ要スルヲ
前件ノ如キ之ノ為
義向ヲ関税定率法ヲ改正シテ協定以外ノ物
品石油其他ノ清酒煙草品ハ者侍品ニ二割乃至五割迄ノ
関税ヲ課シ其協定内ノ物品中砂糖菊酒酒
しやこ小し綿毛布綿毛織ノ各品丈ケハ之レヲ専売
品トシ内外同一ニ一度ニ改存ニ買入官費一信ハ内ノ
程度ニ於テ適宜ニ専売ヲ廃シ又は入し得ルノ
法律ヲ定メ以ン〳〵カラシム
今ヤ内国ノ織布業者紡績業者倉庫銀行下
落ノ天然保護ニ保護サレテ存在ノ緒ヲ開キ元亡

天然保護ノ拠回サルヘト同時ニ各状スヘカラサル困
難ニ陥ルヲ但我国ノ工業ハ資金ニ乏シ初足ノ
義ト器械装置ノ狭カ工人ノ不熟練等ハ他ノ
列国ニ比シ到底海関ノ保護アルニアラサレハ
将来其発達ヲ望ミ得ヘカラス而シテ専売ハ
然果ハ砂糖菊酒酒清酒煙草業者等ハ業
務相当ノ利益ヲ得テ存在スルヲ得ルト雖モ
而モ直接ニ是別途ノ保護ニ浴セサル為
之レヲ得ル所ノ歳入ハ其増減自在ナル故ニ其ヲ
重ク見ルヲ得ヘシ
右ノ専売ヲ執ルトキハ内外ノ砂糖菊酒
紡績倉庫ノ業ハ勃然トシテ興ルヘシト同時ニ

大し輪の〻喊印せしへし
右之通時事之儀入御調書ハ注奉仕候
為御参考上申仕候
明治三十一年九月廿七日　足立孫六
給仕長伊藤憲吉殿

拾二行　碧屋製